

## 創造的表現の開発

### 1 豊かな感性を育む音楽学習創造のコンセプト

我が国の初等音楽教育は、世界でも最高水準にあるといわれて久しい。すなわち、どこにでも楽器があり、どの子もリコーダーや鍵盤楽器にさわることができる。しかし、いきいきと自分自身を教育していける力を育む授業の工夫を考えると、そのことが将来につながる経験となっているのか、あるいは心の中に、よい思い出を残しているのかという視点からも、見直して見る必要があるように思われる。

音楽史をたどると、本来的に音楽活動は集団で学ぶものであり、集団で触発され合う中で個が伸びて行くのが音楽であるといえる。すなわち、音楽に関わる面（音楽の教育）と生活に関わる面（音楽による教育）の総合的な取り扱いの中で表現を楽しみつつ、知らず知らずのうちに基礎能力が身につき、併せて音楽性が高まり、創造的な表現が伸びていくように指導の工夫をする必要があると考える。これより、音楽の学習を通して子どもが音楽的に変容していく授業のあり方について、子どもの活動の姿を通して考察していきたい。

### 2 指導事例 第2学年 「リズムにのって」

#### (1) 指導にあたって

音楽というものは本来、即興的な性格を強くもっている。即興というものは当然自由が保障されていなければできない。演奏する場合などにおいても、もちろんいろいろな法則などはあるがその中で自由が保障されているのが音楽だと思う。その中で声を出す。歌うということがまず最初にあるように思う。しかし、歌うということに関してもその中身に関心をはらわなくてはならない。たとえば、精いっぱい歌うということに関しても、いろいろな幅があるのではなかろうか。これまで、『新版みんなのうた』（光文書院）を児童全員が持ち、この歌集を中心として年間百曲の歌を覚えるとともにいろいろなリズムに合わせて踊りながら歌うという学習を積





み重ねてきた。これは主として授業の導入に毎時間位置づけ2年間継続した。このことは、お互いがどんな歌い方をしても、どんな踊り方をしても受け入れてあげられるといった暖かい雰囲気づくりに有効であった。この雰囲気を前提として、本時の

主題に入るわけである。その様子を見てみると、児童たちは意気揚々とやっている。音程が多少ずれていても、掛け合いがうまく行かなくても、最後まで歌ったり踊ったりさせてやるといったことが、教える側の自由さではないかと思う。子どもたちのあるがままの姿をまず表出させ、それを教師が受け止めることを出発点にするということである。児童も主体性がないと歌い踊るという方法で、自分の感じたことや思ったことを表現することはむずかしいわけで、表現の自由が保障されている場であることを感じるからこそ、主体性を発揮して表現そのものを心から楽しむことができるのではないかと考える。

このような積み重ねを基盤に置き、音楽の三要素の一つであるリズムに焦点をあて、さらに主体的で豊かな表現の開発をめざして次のような授業仮説のもとで授業研究を行った。

## (2) 授業仮説

リズムの表情が感じ取れる活動を取り入れるならば、表情豊かな表現ができるであろう。

この仮説で述べる「リズムの表情が感じ取れる活動」とは、具体的には児童の日常生活の中からリズムを発見して（あいさつの言葉など）実際に表現する活動を意図する。また表情豊かな表現とは、生活の実際場面でそれらのリズムが使われる場合に、その使い手の感情を織り混ぜながらリズムによって行われる表現を想定している。

## 3 分析の視点と分析方法

授業記録をもとに、抽出児童3名を中心に子どもの表情、体の動き、発言、表現などを観察することにより以下の視点より分析し、考察していきたい。

(視点①) 日常生活の中からリズムを発見していくためのだては適切で

### 第三章 豊かな感性を育む授業実践

あったか。

(視点②) 児童は、感情の表出をしながらリズムによって表情豊かに表現していたか。

続いて、抽出児3名の抽出理由について説明する。

児童A (女子) - 気分がむらがなく、何事にも前向きに取り組む。

児童B (男子) - 気分がのれば活発に行動するが、気分がのらない時はじっとしている。授業の雰囲気が高まったかどうかについて判断するてがかりにしている。

児童C (女子) - 体を動かしてリズムをとったり前に出て歌ったりするよりも、まわりの友だちの様子を見ていることを好む。授業が子どもの感性をどうゆさぶったかを予想するてがかりにしている。

#### 4 分析と考察

(1) むずかしいことはあとにして、まず一発歌おうよ… 学習過程1

音と遊ぶ・音と戯れるということは音楽の本質であり、体をリズムにのせて遊ぶことは音楽の根本である。常に音楽の授業の導入は、こうした音楽的な行動の場面から出発したいと考える。

時間 時刻	教師の支援活動 と主な学習活動	児 童 の 学 習 活 動		
		児童A	児童B	児童C
0分 10:45	「まず一発歌おうよ」 ・手のひらを太陽に ・南の島の ハメハメハ大王 ・友だちの歌 ・四季のうた ・線路はつづくよ どこまでも 「汽車は車庫に帰ります。」	・「踊りたい」 ・前に出て踊りながら歌う。 ・友達と手拍子を打ちながら歌う。 ・振りをつけながら歌う。 ・立ったままで歌い踊り続ける。 ・歌った後も、歌集をめくって次の歌を探す。	・歌集を見ながら大きな口を開けて歌う。 ・前に出て踊りながら歌う。 ・友だちと顔を見合わせてたり肩を組んだりして歌う。 ・手に持った歌集を指で追って歌詞を確かめながら歌う。 ・「ええっ」 ・しぶしぶ席に着く。	・歌集を見ながら歌う ・席に座ってほそほそ歌う。 ・表情は変わらない。 ・やや穏やかな表情になって立って歌うが歌声は小さい。 ・友だちに誘われていもむし状の汽車になる。

みんなで歌ったり踊ったりといった場面では、自分自身を発露させながら表現を楽しむ児童と級友の様子をただ見ているだけという児童がいる。視点②より考察すると、本時では5人の児童は歌うことや踊ることに参加しにくかった。子どもの感じ方を生かす授業づくりを目指すのであれば、その授業で扱う題材から子どもが得た印象の表現もまた多様であって当たり前であ

り、動きの大きい表現が学習に対して積極的であり、動きの小さい表現が消極的であるという評価はできない。人間は非常に感動したときには立ちすくんでしまって声が出ないこともある。このように考えていくと音楽の授業は音楽の時間のみに成立するのではなく、実は子どもたちの日常生活の中に自然に歌うとか、自然に踊っているとかそうした音楽的雰囲気が漂っていることがとても大切なような気がする。



本時では、5人の子どもが最後まで立たなかった。前に出てきて歌い踊るという形で表現している子どものエネルギーを、座っている子どもにどう伝えていくかが大切である。参加の仕方は多様であっていいということを前提において、ききあう場の設定・リズムをとめて表現について振り返る場の設定・歌集をはずして歌う場の設定などを盛り込み、じっくりと待つとともに、座って他の子どもの表現を見ているだけの子どものパワーも授業に生かしたい。これは、音楽科では、感性を心の問題として捉えていって、だれにでもできる音楽技術を育てていくことも重要であると考えからである。

## (2) おいしいケーキをあげましょう (リズムの表情を感じながら表現する) …学習過程 2

「おはよう」「お元気でしたか」「ありがとう」「さようなら」など、日常さりげなく使っている言葉の中に豊かな感情表現をともなった実感のある言葉が数多くある。しかし、これらの言葉も単なる社交上のあいさつとして使えば実に味気無い淡々としたものとなるが、その時の感謝なり感激なりの思いや願いの心が同時に込められると、この言葉は音楽的になる。A. W. アンブローズは著書『音楽と詩の限界』の中で「歌曲は音の中に溶け込んでしまった言葉の芸術である」と述べている。この言葉をてがかりに、日本語のアクセントに支えられた言葉に内在されたリズムに、メロディーの持つ生命を加味し、音



### 第三章 豊かな感性を育む授業実践

楽美のハーモニーを感じる学習の創造について分析及び考察を進めたい。

13分 10:58	<p>「今日は皆さんを先生の家にご招待しましょう。」 「おいしい、ケーキをあげましょう。」 「手でお話してくれるかなあ」 「あまい」(手拍子で♪♪♪) 「おでんがありました。からしをたっぷりつけて……食べました。」 「からい・」 ♪♪♪</p>	<p>・「いらん」(いない) ・「あんまりつけないで食べればいもん。」</p>	<p>・「やったあー」 ・「大きな口を開けてケーキを食べるまねをする。」 ・リズムはずれているが、楽しそうな表情で打つ。 ・「いただきますと言っていないぞっ。」 ・とてもからいという表情 ・リズム打ち♪♪♪</p>	<p>・「少し表情が穏やかになる。」 ・まねをしてリズムを打つ。 ・友だちが打っている様々なからいのリズムのまねをしてリズムを打つ。表情には出さない。</p>
21分 11:06	<p>「卵くらいからしをつけます。」 「すっぱーい梅干しを食べます。」 「どれくらいすっぱかったかなあ？」 ・「友だちの家に行ったときにあいさつをしますね。どう言いますか。」 ・「こんにちはこのにちは」 (ドレミファソソファミレド) ・「寂しそうにやって見しよう。」 ・「次は怒りまくってやってみましょう。」 ・「仲直りをしました。うれしそうにやってみましょう。」</p>	<p>・「つけようがつけまいが人のかってじゃもん。」 ・リズム打ちをしながら、「すっぱい」「すっぱあ」「すっぱーい」と叫ぶ。 ・「こんにちわ。」 ・「おじゃまします。」 ・「なんか寂しい。」 ・「こんにちわ、プン」と言いながら、指を立てる動作をする。</p>	<p>・「(から・い)からすぎて気絶するまねをする。」 ・「レモンー。」 ・「こりゃあ、あんましすっぱうないわ」 ・拳手するが指名されない。 ・あくび1回 ・手を振り上げて怒るまねをする。 ・隣席の友だちと顔を見合わせて笑う。表情は豊かである。</p>	<p>・みんなのまねを一応やっているという感じ。 ・音に合わせて表情なくやっている。 ・表情からは感情の違いは感じられない。</p>

視点①より分析していきたい。ここでは、日常生活の中からリズムを発見していくために教師は、次のようなてだてをした。

- ・先生の家で児童を招待するという場面設定により、味やあいさつなどを表現していくようにする。
- ・場面設定のことばかけをしながら、教師も児童とともに表現していく。

児童Aは、友だちのリズム打ちに興味深そうに見ている。「あまい」「からい」などの表情にはならなかったが、最後は「すっぱい」と三度言葉のアクセントを変えて叫んでいる。しかし表情そのものに、変化は見られなかった。

児童Bは、教師といっしょに食べるまねをしたり、からそうな表情をして楽しそうに表現している。リズムそのものは不確かであるが、教師の発問の中から生活経験を思い出して模倣しながら表現している。しかし、梅干しの味のところでは「あまりすっぱくない」といって表現していない。

児童Cは、場面設定に顔がほころんだが、教師や友だちの模倣をしながら遅れ気味にリズムを打っており、表情の変化は見られない。教師の言葉かけや働きかけについて活動するのみであった。

○先生のお家に招待するという場面設定が児童の興味を引いていた。

○場面設定の中で、児童がリズムを発見しながら表現するためには、この学習を出発点としてスパイラル状に深めていくという、児童の経験の積み重ねが必要である。そうした活動を積み重ねることにより、自分たちの音楽を自ら創り出していくための、考えるてがかりが児童自身の中に育まれていくのではあるまいか。

(3) うれしいゾウ おこったゾウ (感情の動きによる表情の変化を表現する) …学習過程 3

ここでは、ボーイスカウトソング『ジャンボリー』を長調や短調で歌うことで、児童が音階から受けるイメージにより感情を揺さぶられ、いろいろな表情を生み出していくことをねらっている。すなわち同じ旋律でも、気持ちの動きによっていろいろな表現ができることを発見し、さらに心を込めて旋律を歌うことを意識化させるためのてがかりを与えたいと考える。

<p>24分 11:09</p> <p>「ジャンボリーやってみようか。」 「うれしい時、どうする？」 (うれしい象の絵を黒板に描く) 【歌】 ・わらえ ワハハ ハハハハ… 【歌】 ・おどれ ビョン ビョンビョン… ・うたえ ランランラン ランラン… (おこった象の絵を黒板に描く) 【歌】 ・おこれ プン ブンブン…  「悲しい時って、どんな様子で泣くの？」  「みんなも、泣いてくれよ。」 【歌】 ・なーけ シクシ クシクシ…  シンセサイザーで伴奏しながら「笑えー、踊れー、歌えー、泣けー」と連続して歌う ・「心の中の動きによって、歌がどんなに変わるかを勉強しました。」</p>	<p>・楽しそうな表情で歌う。  ・「反抗せえー」と叫ぶ。  ・「Aちゃんね、その人たたくよ。」 ・「これ以上盛り上がったら、K君たたいちやうかもね」 ・「泣けて言われたら、ちよっといじわるっぽくなる。」 ・「これ以上泣いたら、もっと大きな声になるよ。」  ・楽しそうに歌ってるが、それぞれの場面ごとの表情の変化はない。 ・「ふーん」</p>	<p>・ほおずえをついて歌う。  ・殴るまねを繰り返す。  ・「仕返しにいくぞー」  ・怒った表情、ブンブンブンのところでどなり声をあげて叫ぶ。 ・挙手するが、指名されない。  ・笑う。 ・筆箱を引き出しから出して、目にあてて泣くまねをしながら歌う。  ・表情豊かに歌い、表現する。  ・「おもしろかった。」(おもしろかった)</p>	<p>・歌っているが、表情の変化はない。 ・歌う様子からは、心の中の表情が変化しているとは、感じ取れない。  ・友だちの方をきよろきよろしながら、歌っている。  ・歌っているが、表情や様子に変化は感じられない。  ・歌っている。  ・歌っているが、表情の変化は感じられない。</p>
---	---	---	---

視点②より分析していきたい。ここでは、感情による表情の変化を表現するために、教師は次のようなてがかりをした。

・既習曲『ジャンボリー』で、笑いや楽しさ、怒り悲しみなどの感情を歌に

### 第三章 豊かな感性を育む授業実践

込める活動を取り入れる。

- ・ うれしい時や怒った時、悲しい時の様子や気持ちについて、いっしょに表現しながら児童に問いかける。
- ・ 「おこれー」「なけー」など、気持ちや様子の雰囲気を表すのにふさわしい伴奏をする。

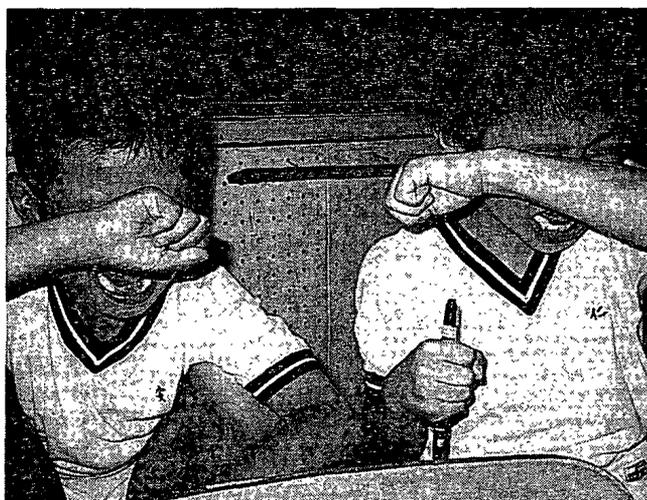
児童Aは、この場面では活発に自分の思いを述べていた。また、笑えでは楽しそうだった様子が、怒れの場面では攻撃的な表情を見せ、さらに泣けの場面では「いじわるっほく」「これ以上泣いたら、もっと大きな声に」など場面を重ねるごとに歌に思いや感情がこめられてきている。しかし最後に4つの場面を連続して歌い表現する場面では、表現することよりもむしろ、教師の伴奏の方に関心が向き、次々と変わるシンセサイザーの音色や伴奏の雰囲気を楽しんでいたようである。

児童Bは、場面ごとに怒った表情や泣くまねなどを楽しんで歌いながら表現している。また、最後の連続して歌う場面では、立ち上がり前に出て友だちといっしょに表現しようとしている。

児童Cは、表情そのものは変わらないが、まわりの友だちの様子をきよろきよろと見ながら歌っている。

以上の手がかりから、個々の児童の感情がどのように動き表出されたかを考えると、児童の感情が変化したから表情が変わったというよりもむしろ児童は、怒ったり泣いたりするものまねを楽しんでいたといえるようである。そうした雰囲気にさせるための支援は有効であったと考えられるがものまねからさらに一步深めるためのてだてが必要であったように思われる。具体的には、児童のイメージを広げるための具体物の提示、あるいはこの学習に取り組む前段階として、音楽を聴きながら静かにその場面の様子や気持ちなどを想像して絵に描いてみるなどが考えられる。

このポイントは「ききあう」ことにあつたように思う。歌にはそれぞれ曲想があり、歌詞の内容にふさわしいメロディがある。ここでは、「ジャンボリー」



一曲で扱うよりも、喜びの歌・楽しい歌・悲しい歌・怒りの歌の代表を、子どもの世界から見つけだして教材として取り上げたほうが効果的であったと思われる。

子どもの世界から音楽を見つける姿勢の重要性を再認識させられた。

(4) おわりの歌はなににしようか？（終わりの歌を歌う）……学習過程 4

音楽の授業は子どもたちの歌いたいという欲求を充たすことで始まり充たすことで終わりたい。常に歌に始まり歌に終わるのが音楽の授業の基本でなくてはならないと考えている。これまで児童は、音楽の時間を中心として学期に一つずつ外国の童謡を言語で覚えることを重ねている。終わりの歌にはこれらがリクエストされることが多い。

35分 11:20	「次の時間は鍛冶屋さんの音楽を聴いてみんなで鍛冶屋さんになります」 「何を歌いたいかなあ」	・楽しそうに鍛冶を打つまねをする。 ・中国語で一番に歌い始める。	・一生懸命に刀を作るまねをする。 ・ほおずえをついて歌う。少し疲れた様子。	・教師を見ながら、鍛冶を打つ動作をする。 ・立って中国語で歌う。
11:23	【歌】ヨイリエチャ シャンエンファン 【歌】オクレールド ウラリユヌ（月夜）	・歌詞カードを見ながらフランス語で歌う。	・立ってフランス語で歌う。	・立ってフランス語で歌う。



5 おわりに

人間のいないところに、音楽は存在しない。とすれば、音楽するということは本能的な人間の営みと深い関わりをもっているのではあるまいか。自己教育力の基盤たる主体性の育成とは、音楽と子ども・音楽と人間との関わりで音楽を考えることから生じてくるように思われてならない。これはすなわち、人間生活に生きて働くものを学力として重視していくという新学力観のコンセプトと一致するものである。

そして、実るか実らないかは未来に評価を任せるとして、たくさんの種を精一杯まいておく。その種の一つ一つに、根気よく水をまき肥料を施し、夢をもって夢を託して授業を進めていきたい。 (登 浩二)